

「心で感じる「絆」の大切さ」

避難者支援 女性警察官

私は東北地方が大津波により大きな被害を受けたことを中学校卒業式警戒中に知りました。

その時、付近にいた中学生が「おまわりさん、東北に行かんでええの？」と声をかけてきました。神戸の子供達は災害が発生すれば多くの支援が必要であることを知っているのです。

なぜなら17年前に発生した阪神淡路大震災を忘れない為に、現在でも震災を知らない子供達に対しても学校や地域の方が「阪神淡路大震災」の経験を語り継いでいるからです。

だからこそ子供達は東北を心配する思いやりの気持ちをもって私に「行かんでええの」と聞いて来たのだと思います。

私はそんな子供達の思いを背負い、震災が発生して約1か月後の4月に女性警察官を中心に編成された「のじぎく隊」の一員として宮城県に出動し、被災地において生活相談を通じた「心の支援」という任務に従事しました。

この「心の支援」という任務は結果が目に見える活動ではありません。

また、津波の被害が大きく警察の力では解決できないことも多く、日に日に「何が出来るのだろうか。ちゃんと出来ているのだろうか。」という思いが強くなり、避難所の方に「申し訳ない」という感情さえ生まれ始めていました。

そんな時でした。石巻市内の避難所で50代の男性と出会いました。

避難所の中で男性はイスに座り上半身を90度前に倒して顔を伏せてしまいました。

しばらくすると男性の肩が振るえはじめ、床に雫がぽたぽたと落ち始めたので、私はびっくりして男性の顔をのぞき込みました。

すると男性は顔をくしゃくしゃにし、奥歯を噛みしめながら泣いていらっしゃったのです。

声をかけると男性は泣きながら私に家族が8人亡くなり、財産を失い、自分がこれからのように生きていけばよいのか分からない不安から三日三晩寝ていないことを話してくれました。

そして男性は私に「のじぎく隊が避難所に入ってきた時にこの思いを聞いてもらおうと思った。あなたに話を聞いて貰いたかった。今、あなたに話を聞いてもらって少し心の整理が出来ました。ありがとうございました」と言って自分が避難している場所に戻って行ったのです。



要望等の受理状況

私はこの男性に出会うまで、何も出来ていない自分が情けなく悔しく思っていたのですが、この男性との経験により「のじぎく隊」が被災者の方の話を親身になって聞くことは、被災者の方の不安な気持ちや傷ついた心の整理をするお手伝い出来るのだと気づきました。そしてこれこそが「のじぎく隊」の支援だと確信し、その後も避難所に足を運びました。

避難所には神戸の子供達からの励ましのメッセージがたくさん届いていました。

そのメッセージを読んだ避難所の方が私に「嬉しいっちゃんねー。遠い神戸の子供が東北を思ってくれてると思うと勇気が出てくるっちゃんねー。」と声をかけて下さり、神戸の子供と宮城県の方との間に強い絆を感じました。

現在、私は阪神淡路大震災と、東北大震災に従事した警察官として「のじぎく隊」の経験を「命の教育～ハートスキルアップ～」と題して小中学校などで子供達に「命」と「絆」の大切さを伝えるための講演活動を行っています。

私は講演において子供達にこのようなメッセージを送っています。

『命は一人に一つしかありません。命は人類が繋いできた奇跡の証です。絆は見えませんが、感じるものです。人がやさしい気持ちで相手を思いやった時に絆を感じることが出来るのです。絆は人を強くします。絆は人をやさしくします。今を一生懸命に生きてください。』



バルーンアートを使用した子どもとのふれあい

講演活動を続けることで神戸の子供達がやさしい青年に成長してくれることこそが、東北の復興に繋がると信じて、のじぎく隊での貴重な経験をこれからも子供達に伝え続けていきたいと思えます。